あとあり或はものを觸れて耵聹栓の位置を轉せしめ或は澡浴、游泳のをり水、耳に入りて栓を膨脹せしめたる爲に急に發することあり

療法

耵聹栓を除くよあたり軟かあるはスプリッチェを用ゐ微温湯にて洗へば容易く除き得れども硬きはえば〳〵水を注がざれば除き難し洗滌法は既に前に言ひき、洗ひて甲斐あきは栓を推しこまざる樣注意して探子又は鉗子を用ゐるべし、されど成るべくは器械に依らざるを好しとすれども栓の壁に密着したるときは探子を用ゐてその一部を剝がしスプリッチェの水を入れ易くして後洗はゞ除き易かるべし又栓の面不平あるものに鉗子を用ゐるときは大ある塊を一度に除き得ることあり但し器械を用ゐるときは必、反射鏡を以て耳内を照らすべし栓の除き難きもの幷に注射すれば眩暈、卒倒を起さんとするものは先づ之を柔ぐべしそれには微温湯を用ゐて足れども一%の炭酸曹達水を滴入すれば更によし既に柔げたる栓は洗ひ出すこと容易あり

栓を除きたる後は聽道よ綿を挾み置くべし、栓を除きても尙重聽の癒えざることあり是皷膜に脈衝若くは內陷を起したるものにて後者は通氣法を行はゞ直ちに回復すべし

第二章　外聽道炎 Otitis externa.

外聽道炎はその一部に限りて病めるものと全部に亘りて病めるものとによりて局發及汎發の二症に分たる

(一)外聽道の局發炎、癤、蜂窩織炎 Otitis externa circumscripta. Furunkelbildung Phlegmonöse Entzündung.

細菌學の研究によりて何れの癤に於てもスタヒロコッケン Staphylokokken と名づくる病菌を見出すべきこと幷に培養したるスタヒロコッケンを皮膚に植うれば癤を生せしめ得べきことを確めたり、スタヒロコッケンは皮膚に塗擦するに汗腺には入らずして毛根に添ひて皮

脂腺に入りこゝに局發膿性炎を起す故に癤は一の傳染病と見あすべきものあり(ガルレ Garre ボックハルト Bockhart)

耳匕等にて外聽道を傷くれば往々局發炎を起すことあれどヘスレルはそを純粹の癤に較ぶるに種々ある相違の點ありと云へり

純粹の癤にありては脈衝は各個の皮脂腺に限られたるものあれどもヘスレルの云へるものは廣く侵されたる蜂窩織炎あり癤のために身の通態を傷るは局所の炎症の爲あらずして全病毒の狠惡あるによる

局發炎は始め其部の皮膚赤くありて稍腫起し、ものに觸るれば痛を感ず炎症の輕きは此期より直ちに消退し重きは尙進んで膿性分解を起すに至る而して後の經過を採るものにありては腫起部の頂に黃色の點を現はし三日乃至六日を經て膿と組織の死片とを是より漏らし暫くにして癒もべし

癤は只一個のみ生ずるおと稀にして概ね同時に若くは相次で數多く生ずるものあり通常數日にして癒ゆべけれど稀には數週間に亘ることあり始めに生じたる癤の膿、周圍の皮膚に付着するときは病菌更に皮脂腺に入りておこに第二の癤を發す、かくの如く膿によりて傳搬するが故に一側の耳より他側に傳はり或は器械等によりて他人に傳はることあり

癤は小兒に發すること稀にて貧血、虛弱の成人に多く殊に婦人に發す往々多少の時日を距てゝ反復この症に罹るものあり

疼痛、甚だ烈くして爲に眠をおさず大に病者を沈鬱せしむ通常夕より夜にかけて甚しく加はり朝に至りて大に減じ或は全く止む往々周圍に波及し同側の頭又は齒に痛を感ずることあり下顎を動かせば痛を增すが故に固形の食物を採りまたは談話をおすこと能はず身の通態も發熱の爲に多少傷はるべし

重聽の症は外聽道もし腫脹の爲に閉ぢ或は分泌物の爲に塞がる時は甚しとす腫起と脈衝の模樣とは甚た區々にして只少しく腫起を見るのみあることあり或は著しく腫起して外聽道を閉ぢはつるおとあり

往々脈衝、外聽道の外まで蔓延して耳珠及耳翼の周圍をも腫起せしむることあり特に蜂窩織炎に於て然りとす癤の發するは外聽道の骨部に於けるを多しとす

往々癤の爲に(殊に劇痛を發するもの)表面の骨疽を起してその破壞部に肉芽を生ずることあり肉芽は癤の癒ゆるに從ひて自ら消滅し或は殘りてポリユウペンをなす骨疽或は顱底窩に達し或は乳嘴突起の蜂窩より横竇まで進みて死したるものを經驗せしことあり

(二)外聽道汎發炎 Otitis externa diffusa.

汎發炎を局發炎と別つこと頗る難し是前者は多く後者に併發すると往々汎發炎の膿瘍を以て終ることあるとによるあり

外聽道の汎發急性炎は多くは間耳急性炎の分症たりその症は後に間耳炎の條にて說くべし特に發するもの丶原因は概ね化學的、溫的、器械的の刺戟ありたとへば冷水を注ぎ酒精等を滴入し或は異物を取り出さんとして傷けたるが如し斯る場合には屢間耳に充血及脈衝を併發することあり

この病は通常一側あり小兒期に於て發すること多し

外聽道の外皮は內部に於ては直ちに骨膜に密着せるが故にこゝに事あれば骨膜もまた多少侵さるゝことを免かれずこれこの部の炎症に劇痛を發する所以あり又副行脈充血によりて腦に刺戟症狀を發せしむることあり

症候は始め耳に緊張の感と瘙痒とを發し熱發し搏動と能感性耳鳴とを覺ゆ次て疼痛を起す身の通態は熱發の爲に傷はるべし疼痛は速に加はり頗る烈くして耐へ難く且つ同側の頭半に及ぼし緊痛して口を開くこと能はず概ね三四日にして極度に達しのち諸症漸く輕快す

上皮は眞紅色にあり甚しく腫脹して聽道壁の相觸るゝに至ることあり重聽は狹窄の度と分泌物の模樣とによりて輕重の差あり間耳炎を併發したるときは更に重聽を加ふ鼓膜の見もるは只初期のみなれど其折すら既よ充血甚くして上皮の剝脫せるを見る分泌物は始め漿性

にしてもし之に耵聹腺の分泌物を混ずるときは黄綠色をなす稀には血を交ふることあり後に至れば濃稠にして粘液樣膿性をなす病輕ければ漿性の期にて治し然らざれば炎症の諸徵持續して粘液樣膿性液を分泌するに至る

高度の炎症にありては耳翼の前部腫起し或は乳嘴突起脈衝して按すれば痛を加ふ小兒にありては顎骨後窩の腺甚しく腫起することあり稀には鼓膜破れて鼓室の粘膜よりもまた分泌物を漏すに至る往々初期より外聽道上皮の剝脫することあり剝脫せる上皮は白き薄片をなし分泌物と共に漏れ出で或は耳内にかゝりて殘る通常上皮の剝脫するは急性の症候及分泌物の減退したる後あり

炎症の諸徵退くときは分泌物從ひて減じ暫くにして全く止むもし然らざるときは變して慢性炎となる分泌物の久しく持續するは外皮の脈衝止ざるか鼓膜に破孔ありて間耳よりそを漏らすあり

慢性炎は急性炎を前發することなくして生じ、腫起せることあり或は

然らざることあり時々分泌液を漏して久しきに亘る

◎療法◎

外聽道の急性炎は局發汎發ともに先づその害となるべきことを避くべしすべて頭及病所を充血せしむるものは皆害ありたとへば勞働、刺戟すべき飲食物殊に酒類、温の劇變、器械的刺戟(强ひて外聽道を撿し或は洗ふが如きもこのうちあり)等の如し充血を減ずるには局所に瀉血法を行ふ即ち耳珠の前に水蛭十條乃至二十條をつくべし

温罨法は大に効ありヒポクラアテスは海綿を熱湯に侵して搾りたるを耳にあて用ゐたり但し温罨法を久しく持續するはよろしからず爲に却て冷罨法を要するに至ることあり温を平等に保たんには綿にて病所を掩ふべし

少しく壓を與ふるばかりにして綿を聽道よ挿入し置けば効あり、もしこれに昇汞水または酒石酸醋礬土の十%液を浸して用ゐなば特に効あるべし

常に癤を生じ易きものは精密に消毒するを要す即ち早く切開し〇、一%の昇汞水を用ゐて洗ふエエベル、リィルの稱用したる純酒精は頗る効あり用法は膿の有無にかゝはらず凡五分時間ろを外聽道に充たし後乾かして壓抵子 Kompresse を施すあり但しこの法は毎半時間乃至一時間ゟ反復して行ふトロルッの耳浴法は鎮痛の効著しからずその法は微温湯を聽道に注ぐにありこの用液として〇、一%の昇汞水を用ゐるをよしとす

癤は切開すべきものあるや然らざるやそを切開すべきものとせばその時期はいかにとの議につきては諸家の說區々ありゥラァメルは決して切開するに及ばずと云ひトロルッは早く切開せよと云ふ他は概ね化膿したるのちに切開すべしとの說あり切開するには探子を觸れ試みて痛を感ずること尤も强き所に於てす時期早ければ切る折に痛强けれど充分に切れればのち大ゟ痛を減ず化膿したるのち切れば痛は直ちに去るべし但し後者に於ては探子を用ゐて悉く內容物をおし出

すべし

ハルトマンは癤を切開する爲に幅狹く脊眞直に尖とがりて、もろはある刀(第二十九圖)を用ゐたり用法は刀を外聽道軸にむけ癤の根底を貫きて表面へ切り放すあり斯くすれば速に充分切り開き得るのみならず痛もまた少し

第二十九圖

蜂窩織炎及汎發炎は切開するも無効あることあり或は却て惡しきことあり

急性炎の諸徵去りて後尙分泌物を漏すものは綿を用ゐ注意して分泌物と剝脫したる上皮とを除き聽道を洗はゞ善く拭ひて乾かし肉芽を生じたるは括斷して除くべし腫脹は小あるも能く慢性炎の原因をなすことあるを以て硝酸銀または格魯母酸を塗りて萎縮せしむべし

外聽道の表面を消毒して炎症の再發を防ぐには昇汞水または昇汞酒精(〇、一%)を滴入すべし

分泌物の久しく出づるもの及慢性炎には後に記せる間耳慢性化膿症に用ゐるが如き法によりて硼酸を使用すべし月を經、年を越えていえざる外聽道分泌物のたゞ硼酸を吹き込みたるのみにて癒ることあり但し屢反復して用ゐむことを要す

第三章　外聽道鱗落炎 Otitis externa desquamativa

千八百七十四年ウレエデンは始めて外聽道の栓塞したるもの十二症を公にしたりしがその症は何れも耵聹栓とは種々の關係に於て異るものありき今其實地の關係よりして區別を立つれば耵聹栓は豫め炭酸曹達水を滴入して後洗へばたやすく除き去らるれどもウレエデンの記したる栓塞は密に外聽道壁に付着するが故に之を柔げ且取除くこと頗る難しその栓は硬靭にして色白く質は多數の上皮葉々層をなして凝集したるものあり顯微鏡にて檢するに上皮細胞よりなれるを

見るウレエデンは之を閉塞性角質炎 Keratitis obturans と名づけたり是外聽道上皮の夥しく剝脱するによりて生ずるものなればありこの病は特發せるが如きことあり或は瘧衝の症に續發せるが如きことあり通常外聽道の深部及鼓膜より發するものなれども往々鼓膜のみより發するようとあり然るときはそを鼓膜鱗落性炎 Myringitis desquamativa と稱すべきなり症狀は耵聹栓に發すると同じさまにて重聽及耳鳴を起すたゞし是にありては栓は直に鼓膜に觸るゝが故に落屑少しく積むも既にこの症を起すべし

ウレエデンは上皮栓をたゞ一側にのみ見きと云ひしかどハルトマンは双耳に於て再三發したるを經驗したり即十二三歳ばかりなる童の五ヶ年間くりかへして栓塞を生じその度ごとに鼓膜の破孔及間耳炎を發するを見きと云ふ往々鱗落性炎の急に起るあとありゴットスタインはそを鼓膜鱗落急性炎 Myringitis desquamativa acuta と名づけぬかゝる急性のものにありては疼痛及發熱ありて聽道の深部に灰白色の

膜を生じそを取り出せば全く皺膜の型をなし顕微鏡にて檢するに上皮の集まりてなれるを見る

◎療法◎

ウレエデンは栓は苛性の水にて柔らげたる後、水を注ぎて除き外聽道の皮膚を健康ならしめんが爲にい昇汞水または沃度加里水を用ゐるべしと云ひきされど膜は固く付着せるが故に是を去ること頗る難し

ピンセットにて摘めば摘みたる部のみ取れて餘は殘るべし探子、耳匕等よて栓の一部を付着部より剝がしその間に水を注げば全く除かるゝおとあり斯するも尙効なきときはクロヽホルムにて麻醉せしめキウレットCurettesを使用す通常用ゐる滷水即ち曹達水、石灰水は効を見がたけれど始めに二%の水楊酸油を滴入して後おれらの液を注射すれば効あることあり栓を除きたるのち〇、三乃至〇、二%の昇汞水を注がば病はいゆべし

第四章　外聽道に生ずる細菌 Pilzbildung im aeusseren Gehoergange. Otomykosis aspergillina.

マイエル Mayer は千八百四十四年に於て始めて外聽道の細菌を記せしが後ウレエデンに至り數多の經驗よりてその症狀を詳かにし近來シイベンマン Siebenmann の研究は遂に此病のすべての事項を明かならしむるおとを得たり

耳に生ずる細菌 Pilze は何れも微 Schimmelpilze にして其うち黑色なるをアスペルギルルス、ニイゲル Aspergillus niger 黃色なるをフラウス flavus 雲烟の如きをフミガアッス fumigatus と名づく顯微鏡を以て檢するに皆節ある菌線 Hyphen より成れる幹 Thallus にして實絲 Fruchtfaden は是に直角または鋭角をなして連れり實絲のさきの圓く膨れたる部を實頭 Sporangium と云ひその表面には冠狀に連れる球狀の細胞即菌芽

Gonidinを持てりこの菌芽は常よ空氣中に浮べるものなれども健康なる外聽道壁はそが培田とあらず耵聹及膿をもてる外聽道もまた然りシイベンマンはこのものゝ最良なる肥料は血漿なるが故よ外聽道に於て黴を見るはたゞ其部の濕疹と膿性耳漏の漿性に變じてやゝ分泌量を減じたるときのみなりと云へり黴は健耳に植うるも生せず

キルヒヲルは黴の外にピチリアシス、エルヲコオロル Pityriasis versicolor のミクロスポオレン、フルフル Microsporen furfur によりて外聽道に生じたるを經驗したりこのものは黃褐色の小苔にてその特徵は煩痒あり

細菌は主に鼓膜及外聽道の內部に生ずれども往々外聽道の全部に蔓延し甚しきは全く聽道を塞ぐに至ることあり菌膜 Membranen の生ずるはマルピギイ層または眞皮の表面にして表皮にあるは稀なり菌線はマルピギイ層の細胞より發することあるべし菌膜を檢するに分泌物なきものは只二三の白點または黑點を見るのみなるおとあり或は

全き菌膜の鼓膜及外聽道壁にかゝれるを見るおとあり分泌物あるものは聽道の菌膜黑斑をおしてそのさま恰も濕ひたる新聞紙を見たらんが如し

細菌は往々別に病症と名づくべき程の徵なきあり多くはたゞ搔痒と聽道の菌膜に閉ぢられたる爲に最輕度の重聽及耳鳴を起すに過ぎず偶々疼痛を發し少許の分泌物を生ずることあれどこは併發したる外皮炎の症候なり、まれよは鼓膜生孔及間耳炎を起すことあるべし

耳にグリセリン、亞鉛、明礬、單寧等の溶液を滴するときは細菌の發生をたすく物を外聽道に觸れて外皮炎を起さしむるもまた細菌の生ずるにたよりよし

療法

療法の主なるは細菌を除くと減すると其因たる濕疹及耳漏を除くとにあり皮表に密着せる菌膜はたゞスプリッチェにて洗ひては除かるゝおと稀なるが故にまづ探子を用ゐて鬆疎ならしめたるのちよ洗ふ

其除き難きものには滅菌法を行ふべし消毒劑はそのまゝ用ゐるも溶液とおすも共に効を奏すること少おし尤確なるは純酒精を用ゐるにありベッオルドの處方ならひて之に二乃至四%の水楊酸を加ふれば殊に妙おり酒精はたゝ細菌を滅するのみならず併せて分泌物を減する効ありたゝ細菌を除きたるのみにては其甲斐わらずして數日の後再び發生すべし、ワルフの試驗によれば硼酸は細菌に寸効を奏せずと云ふ

キルヒヂルはピチリアシス、エルシコオロルにカヂン油(Ol. cadin 杜松子油の一類)と純酒精の同量を和したるものを一週間に凡そ二三回づゝ塗りて癒すことを得たりと云ふ

第五章　外聽道の匐行疹 Herpes auricularis

外聽道の特發病として尙說くべきものは匐行疹おり此病は耳翼及外聽道の外部に生じ甚しき緊張と搔痒との症を以て始まり忽ち烈しき疼痛を起すおと恰も外聽道の急性炎に於て說けるが如しおれを檢するに外聽道壁甚しく赤腫して表面に漿液を含める水泡を生ず水泡は數日の後諸症の退くにつれ乾きて茶褐色の痂をおす偶〻粘液性の分泌物を殘すことあり、皺膜に匐行疹の發したるを見しはたゝ一回のみ匐行疹は特に發し或は外聽道及皺膜の急性炎に併發すこれに侵さるゝは多く成年のものおり或は常に消化器を傷ふものに發すといふものあれど信じがたし經過は尤早く通常數日にて癒ゆ

療法

軟膏を用ゐて痛を和ぐ、これ即ち緊張を減せしむるおり(萇菪エキス一、○ワセリン一〇、〇)麻醉劑として內服せしむべきはクロラアルヒドラアトおり

第六章　外聽道の梅毒 Syphilis des aeusseren Gehoerganges

外聽道に生せる第二期の症たるコンヂロオムによりて往々全身梅毒を示すことあり始めは巾廣くして赤き丘疹を生じその面乾きたれども後には濕ふ腫脹は漸く增加し數所に生じたる丘疹は遂に合して一とあるおとあり之を檢するに特有ある模樣を呈す聽道壁は糜爛して容易に出血し分泌物は頗る多くして藥膿性あり

この症は外聽道の外部を侵すのみあることあり或は內方に蔓延して鼓膜に及び遂に之を破るに至るおとあり

聽覺は腫脹の度に應じて多少減損せらる痛は概ねおきものなれど若し腫脹部相互ひの間ゑ龜裂を生ずればそを感すべし通常自然にまかすも癒ゆれど治療を加ふれば速ゆること早し

◎療法

コンヂロオムの初期には赤降汞軟膏を塗り昇汞水を灌ぎ或は甘汞を撒布す

甚しく糜爛したるものにても全身療法を用ゐず硝酸銀にて腐蝕せしめて速に全癒せしめたることあり消毒劑を以て耳を清むれば治癒をたすく局所療法にて癒ねがたきは塗擦劑を用ゐ或は水楊酸汞を用ゐるべし

第七章　外聽道の異物 Fremdkoerper im aeusseren Gehoergange.

外聽道の異物は其もの甚だ種々にして硬きものにては小石、南京珠、石筆、果核、軟かおるものにては綿塊、穀物、及植物の小片等あり穀物は水に遇へば膨るゝ性ありその中殊に異物とおりやすきは赤小豆にてかつて兩側の耳に二粒づゝ入りたるを見しことあり是小兒の病床等にあ

るとき赤小豆の入りたる手珠といふものを弄すること多き故あり生物にては蠅、蚊、蚤等の眠れるをりおぞに入りこむことあり、耳蛆といへるは耳漏病者の耳にうみつけたる蠅卵の孵化せしものあり

耳蛆い夥しく生じ其著く動くを以て知らるるもし鼓膜に孔あるときは鼓室に這ひこむべし異物は皆偶然入り込むものなれども往々俗間にて病を治する目的にてものを耳に入るゝことありたとへば歯痛あるとき葱其他のものを耳に入れ脈衝あるをり豕脂を入れ耳を譏るために綿を入るゝが如し其他耳病の妙薬ありとて蟬の殼を黒く焼き油にて練りたるものあり之を用ゐしものゝ耳ゑ往々黒色の塊を見るおとあり異物を見るい概ね小兒あり是小兒は物を己の体腔に入るゝことを好むによれり

異物は外聽道の外方にかゝれることあり或は深く入りて鼓膜に接したる下壁の窪所にとゞまり是を窺ふに只その一部分をのみ見ることあり而して其深く入りたるは偶然あることあり或は外方にかゝれる

を採り出さんとして却ておしこみしによるおとあり甚しきは鼓室までおしおまるゝことあり

異物は外聽道に存するも概ね脈衝を起さず嘗てカリエス性臼歯の四十年間何事もおくして聽道ゑとゞまりしを見しおとあり石筆の長さ一寸太さ數分あるが二十年ばかり留りしことありまた小兒の外聽道に砂礫の數多く入りたるを七ヶ年間ばかり經たるのち始めて見出しゝことあり其他穀類の數年間留りたるは往々見るとおろあり

異物の症候は耵聹栓に同じ外聽道全く塞がれば充塞の感及重聽を起し異物の所在内方にして鼓膜ゑ接すれば耳鳴眩暈す稀には嘔吐することあり生物はその運動を鼓膜に傳へて甚だ恐るべき音を感せしむされど蠅の蛆はたゞ僅に音を感せしむるのみ

術におれざるものゝ尤危險あるは異物を取り出さんとするおとあり殊ゑ耳内を照さずしてピンセットを用ゐるは甚だ危し是が爲に異物を深く壓しおみ或は鼓膜を破りて鼓室に入らしむることあり時とし

て い近接部を傷け或は脈衝を起して死を致すに至らしむることあきにあらず又たとひさることあきも豆あどの皮殼を破り爲に水を引き膨れてます〳〵取り出し難からしむることあるべし

異物を取り出さんとして過て深く壓し入れたる爲に死に至らしめたる例はまゝあることにて諸家のそを記せるものあり即ちエントWendtの報告によれば異物を取り出さんとして過て奥深くつき入れたる爲に烈しき脈衝を起し止むことを得ずクロヽホルム麻醉を用ゐて漸く取り出でたれど後腦膜炎を發して死したるものありサバチエエSabatierは耳に入りたる綿球を取り出さんとして手あらき處置をおしたるため遂に死に至らしめしものあるを報じたりレヰィLeviの報告によれば兵士が已れの職務を遁れんとて燧石を耳に入れしを取出しゝよ皷膜に大ある孔を生じをりて次の日顔面神經麻痺及間耳炎を起し遂に腦膜炎の症狀にて斃れたりと云ふフレンケルFraenkelもまた之と同じ症を報告したり即耳に入りたる燧石

を除かんとして却て皷室におし入れ聽骨を折り迷路壁の一部を傷ひ遂に腦膜膿性炎を起して死したるなり、モオスハ聽道に入りたる石の小片を取り除かんとて二三の醫が耳内を照さずして鉗子を用ゐたる爲に出血及顔面搖搦を起し次て度々烈しき出血ありて惡寒戰慄に兼て譫語を發し遂に死に至りしものを剖觀せしに皷室の壁破れ聽骨碎け頸靜脈及顔面神經管に孔を生じ肺と筋とに轉位竈あるを見きと云ふ、ピルヘルPilcherの言によればロンドン市立病院London Hospitalの外科醫は嘗て病者が耳内に釘を入れたりとの言を信じそをとり出さんとて過ちて槌骨を取り病者は之が爲に二日を隔てゝ死したりよりて之を剖觀せしに更に異物を認めざりきと云ふ

異物の爲に稀に奇なる神經症狀を發することありたとへば咳嗽の發作、止みがたき嘔吐、偏頭痛、嚥下困難、麻痺、アトロヒィ、癲癇、全身衰弱等なり

フランクは已れの教科書中に長き間留まれる異物は他側の健耳をも併せて重聽おらしむべきよしを記せり

◎療法◎

異物のうち南京珠、小石の如き小き固形物は頭をその方へ強く傾け手まて下より打てば轉び出づべし其他はすべてスプリッチェを用ゐ微温湯にて洗へば概ね除かるゝが故に勞を厭はずくりかへして洗ふべし、クラアメルは經驗により異物は何れの場所にあるにかゝはらず水を注射するによりて除かれざることあしと斷言したりしかと悉く然るにあらず耳内にありて膨るゝ性のもの、表面の粗糙にして聽道壁に嵌りこみたるもの等は器械を要することあり

異物を取り出さんが爲め水を注射するにも器械を用ゐるにも外聽道の卵圓形なるに注意すること肝要なりこれ圓き異物の入りたるときは其上下に於て外聽道壁との間にすきまを生ずるを以てこゝに水を注き或は器械を挿入して異物の後に達せしむることを得べければあ

り但、すきまを認め難きものに水を注がんとするには壁に向はしむべし水の働きは異物の後に回りてそを外方におし出すにありて此ときは反射鏡にて窺ひつゝ採子等を用ゐ少しく位置を轉せしめて洗へば概ね目的を達し得べしッアウファルは水にかへて油を注ぎたりおれ植物性の異物を膨脹せしめざらんとてあり、また氏は異物の耳内にて膨れたる折にグリセリンを注げば萎縮せしめ得べしと云ひき水を用ゐるにも器械を用ゐるにも尤注意すべきは異物を内方におしおまざるにあり、脈衝の爲に外聽道の外部に腫脹ありて内部の異物には別に危險の症狀を現はさゞるときは先づ脈衝を去りて後、手を下すべし神經質のもの及小兒には〇ロロホルムを用ゐれば大に便あり

用器は次の如し而してそを撰ぶは異物の形狀、性質及所在部に關す

(一)鈎狀にまがりたる探子　通常の銀製探子のさきを鈎狀に曲げたるものにて、すきまあるときはそを異物の後に輪りて引き出すありこの

法を施し得れば異物の種類の何なるにかゝはらず取出さる、銀製の探子を得ざるときは鈎狀に曲げたる針をコルヾ片にさしこれを柄とおして用ゐるも可あり曲りたる薄き篦、小き鋭鈎もまた探子にかはることを得べし

(二)異物鈎(第三十圖)は小鋭鈎にして特に柔かゐる異物を取り出すに適せり用法は鈎を異物と外聽道壁との間へ平かに輸りてゝよてさきを異物の方よまはし之につき入れ靜に動かしつゝ外方に引き出すゐり鋭鈎に換ふるに眼科にて用ゐる虹彩針を以てして目的を達し得しこと少からず鋭鈎はそのさきを聽道壁に觸れざる樣注意すべし

第三十圖

(三)尤危險ゐるは鉗子またはピンセットを用ゐるおとなりこれ此等の器は異物を內方に壓し入るゝが故ゐり殊に異物圓くして表面滑かに質固きものには決して用ゐるべからずそを用ゐるべき場合はたゞ異物の一部外方に現れその質柔かにして確に挾み得べきときのみ

(四)螺錐狀器　たま〳〵之を用ゐて柔ゐる異物を取り出し得ることゐりおの器は二重の螺旋をおしてさきの鋭きをよしとす用法は管によりて耳內に輸り異物の中へもみ入るゝにあれど、そを行ふには先づ探子にて異物を撿し確に內方へおされざるものゐるおとを知りたる上ならざる可からず、さきの鋭きものは容易に異物にもみおまれて、そを保つおと確かゐるが故に固く嵌入したるものをも取り出し得ることあり

(五)外聽道の內方または鼓室に入りたる異物は鼓室及乳嘴突起に膿性炎を起さしめ危險の症候を現はすものあれば必ず取り除くべし、そを除くまは耳翼を剝がし或は外聽道の後壁を鑿にて削るを要することありモルデンハウエルの行へる法は耳翼の付着部を骨膜に至るまで切開し刀柄の助けをかりて聽道の軟骨部をその周圍より剝がし骨部との界にて切り開くゐり而して異物を鬆起するには鋭角に曲りたる

挺を使用す

嘗て間耳膿性炎にかゝれる十二歳の少女が南京珠を耳に入たる爲に外聽道の外部腫脹し耳の周圍殊に乳嘴突起及耳翼の前部に痛を起し發熱したるに耳翼と外聽道軟骨とを剝がしてモルデンハウエルの器を用ゐ容易にそを取り出し得たることあり、また果核を耳に嵌入したるを取り出す爲に耳翼を剝したることありしがその傷は何れも第一期癒合をおすあとを得たり

鼓膜もし破れたるときはポリッチェルの法によりて空氣を通じ或は水を輸り試むべしドロオはかくして皷室に入りたる石を取り除きたることあり

生物の耳に入りたるときは水を外聽道に滿たせば直にその苦惱を去ることを得べし之を除くにはスプリッチェにて洗へば足れりと雖ども時としては水劑、油劑或は酒精を滴らして其物を殺したるのち除くべき事ありポリッチェルの説によれば蠅の蛆は石油又はテルペンチ

ンの數滴を耳に入るれば外へ這ひ出づべしと云ふ

其他管を用ゐて異物を吸ひ出す法あり又粘釣法 Agglutinationsmethode ありこれにてはホッケル Hocker 初めて封蠟を綿球のさきにつけて小石を取り出せり近來ロイエンベルフはこれに膠を用ゐき古くは柔き異物を紅熾したる鐵線にて燒きあぶつ法ありチルトリニィはかゝる目的に燒灼電氣を用ゐきハルトマンもまた此器を用ゐ試みしことあり即、漏斗を深く耳内に入れ反射鏡にて照らしつゝ燒灼器を直ちに異物に接せしめしかど、あまりに痛强くして病者耐ふるあと能はず半途よりて中止せりグルウベルも亦ハルトマンと同じ經驗をなせり即ち是を用ゐたる爲に烈しき脈衝を起して他法をも行ひ得ざるに至らしめたり、ツアウファルは嘗て一病者よりロンホルム痲醉を用ゐ燒灼器にて異物を燒き碎きしに病者はのち腦膜炎を起して死したりとぞ

第八章　外聽道の狹窄及閉鎖 Verengerungen und Verschliessungen des aeusseren Gehoerganges

外聽道口の狹窄はたまゝ〳〵婦人に見ることあり歐米の婦人は帽子の紐にて耳翼を强く頭におしつくるを以て耳翼はその形を變ず而して耳翼の內部ある耳介は恰も玉の一截片の如き形をあすが故に外方より壓加はれば前のかた即外聽道口に向ひて强くおされ若しその壓絕えず存するか或は屢加はるときは耳介は遂にその壓せられたる位置に留りて外聽道口の狹窄または閉鎖を起すべし但この變位は耳翼を後方に引けば一時故に復すべし

外聽道の狹窄及閉鎖はその後壁の弛緩したる爲に起ることあり、こは之ば〳〵外聽道炎、就中癤を患ふるものに於て見る所にてその起る所以は腫脹したる皮膚の皮下組織より剝かるゝによる但探子または漏

斗を入るれば弛緩部はたやすく、おしのけられて內方を窺ふことを得べし

かゝる病變の爲に聽覺を傷へるものは小き管を聽道に挿入して音響を通ずれば直に故よ復すべし

外聽道の狹窄及閉鎖は又慢性の炎症ことに濕疹の爲に皮膚の肥厚して起ることあり甚しき狹窄を起したるものはその原因たる病を療するかたはらラミナリヤ又は壓したる海綿にて孔を廣ひるやう勉ひべく全く鎖し果たるものは手術を行ふべし手術とは鎖したる部を十字形に截りて瓣創を作るを云ふハルトマンはかゝる閉鎖症に球頭刀を用ゐて孔の周緣を切り採りたることあり術後の處置は癒着を起さゞるやう注意するよりこれには水を引きて膨るゝ性あるものを手術したる部に挾み置くにあれど斯るもの譬ばラミナリヤの栓の如きは病者痛に耐へがたきが故に鉛管に軟膏を塗りて用ゐるをよしとす鉛管はそのまゝ數週間挾み置きて瘢痕を結ぶに至らしめ得べし

外聽道の骨部に於ては往々骨腫を生じて狹窄或は閉鎖を起すことあり

りあるものは証すべき原因なくして生じ或は生れながらにして、その部に素因あるが如きあとあり炎衝を起したる後、生ずることあり原因の不明なるもの及素因ありて起るものはその發育甚だ緩慢にして新生の骨は極めて硬く所謂象牙樣腫起 Elfenbeinexostose をなす炎衝の後に起るものは發育頗る速なり骨腫は著く隆起し廣き基底にて骨に連れると、頸をもてるとあり位置は通常上後壁なり多くは數多の隆起をこゝに生じて外聽道を狹むるものなれども稀には骨膜炎の爲に骨を新生して周圍より一樣に狹むることあり炎症によりて生じたる骨腫は象牙樣腫起の如く硬からず

症狀は骨腫の大さに從ひて同じからず小なるは知らずして過ぎすことあるも大なるは甚しき重聽を起す骨腫と壁との間に分泌物又は剝脫したる上皮あるが爲に起れる重聽はそを取り除けば恢復するあとを得べしもし狹窄部の後に膿の滯れるときは生命を危くするに至ることあるべし

モオスは骨腫の爲に三叉神經痛を起したるものを經驗せしことあり而してこの痛は骨腫を治せしに去れりハルトマンは外聽道を閉したる骨腫を除きしに、のちこの病者の重き間耳急性炎を起しゝあとありき

◎療法◎

狹窄尙甚しからずして重聽はたゞ空間を塡めたる分泌物の爲のみなるときはそを取り除くのみにて足れり若し洗器または探子を用ゐがたきときは鼓室小管にて洗ふ即この管を狹窄部の後に送りて水流を導くなり骨腫の漸次發育するものなるを認め得たるときは早く取り除くべし聽道を狹むること少き程手術は行ひ易きものなり頸ある骨腫は鑿にて打ちはなすべし

骨腫の大にして硬きものは挾き場所に於て鏡を用ゐつゝ手術を施さゞる可からざると手術中出血の爲に病所を掩はるゝとの困難あり手

術のうち確實にして然も危險少きは鑿を用ゐるにありその法はクロヽホルムを以て病者を麻醉せしめ中くぼの鑿を外聽道の縱軸にそひて入れ其部を掩へる皮膚をも顧みずして骨腫の一部或は全部を打ちはなすにあり ハルトマンはかくして全く外聽道を塞ぎたる象牙樣腫起をたゞ一擊に除き得てそを撿したるに長さ十四ミリメエテル幅七ミリメエテル厚さ五ミリメエテルありき又必要ありて骨腫を鑿にて片々よ取り除きしことあり、捻錐 Drillbohrer を用ゐるは鑿を用ゐるに比すれバ危險にして時を費すこと多くその効もまた確實あらず

當時に至るまで骨腫を治療したる數は尙僅かあり ハイニッケ Heinicke ルセエは常に鑿を用ゐクノルレ Knorre ブレエメル Bremer は始め捻錐を用ゐのちに至りて鑿を用ゐたり フィイルド Field は屢、穿齒機 Zahnbohrermaschiene を應用せしかど、かゝる細き錐を以て骨腫を穿つには殆んど一時間ばかりを費さゞる可からず曾て此器を用ゐ鼓膜を透して鼓室まで、もみこみ爲に顏面神經麻痹を繼發せしめしことありきモオ

スは厚さ七ミリメエテルの漸衝性骨腫に通常の捻斷器を用ゐて好結果を得しことあり

第九章　外聽道の血腫 Bildung von Blutblasen im aeusseren Gehoergange.

外聽道の皮下に溢血を見るは甚だ稀なり之を生ずれば上皮の下に黑き水樣の血の溜れるを認むべし

血腫は主に間耳及外聽道の急性炎より生じ特にインフルエンザに生ずハルトマンは曾てメニイル病 (Menier'sche Erkrankung 迷路病の編にいづ)を患ふるものに血腫を生じて外聽道の前壁を全領したると間耳急性炎の後症と共に突然重聽を來したる病者の外聽道下壁の內端に血腫を生じたるとを經驗し両者ともに穿刺して除きたり

第十章　外聽道のカリエス及死骨

Karies und Nekrose des knöchernen Gehoerganges.

外聽道骨壁の病は或は外聽道炎の進襲によりて起り或は乳嘴蜂窩の炎症の蔓延するによりて起るカリエスまたは死骨を生ずればその部の骨質耗はれて瘻管をおし膿を漏す往々瘻管の緣に肉芽及大小のポリユウペンを生ずることあり このポリユウペンもし大おらざれバ探子によりて瘻管を診することと容易おりポリユウペン樣の新生物は若し深部に濃き分泌物のかゝれるときは除くも再び生ずるものあるが故に先づ之を去らざる可からずこれを去るには皷室細管を用ゐるを便おりとす

曾て外聽道の外部は全くポリユウペンにて滿され耳の周圍には瘻管三ありて一は乳嘴突起一は顎骨後窩一は頰部に口を開けるを見き而

してポリユウペンは既に括斷すること能はざりしかば皷室細管を其後に輸り洗ひて酪樣膿を多く漏らしゝにポリユウペンは自ら痿縮せりさて耳を檢したるに外聽道の後壁は全く潰滅して外聽道と皷室及乳嘴突起部とは相合して一の大なる腔洞をおせるを見たり

外聽道にカリエス樣の病を生じたるときはおれを刺戟すべきものを避け注意してその部を清め消毒するを要す表在せる瘻管のカリエスは銳匕を以て掻き採れバ大に効あり、すべて一般の体質に注意し榮養を佳良おらしむること肝要なり

第七編　鼓膜の疾病 Erkrankungen des Tronmelfells

解剖要領

鼓膜の用は外聽道によりて外氣より導かれたる音波を受けそを聽骨に傳へて迷路に達せしむるにあり其形は縱徑九ミリメエテル横徑八ミリメエテル厚さ一ミリメエテルありて漏斗狀に窪めり膜の周圍の肥厚したる緣即軟骨輪 Annulus cartilagineus は外聽道の內端にあたれる鼓膜溝に嵌入せり鼓膜溝の前上部は所謂リサニイの截痕 Incisula Rivini にしておれ鼓膜のうち槌骨短突起の上部は別にスラプチルリイの弛膜 Membrana flaccida Shrappnelli. と名づけられたり鼓膜の位置は前下方に傾き外聽道の上下兩壁に百四十度の角をなせり

鼓膜は漏斗狀にてその上半は外聽道の上壁と殆んど同じ方向をな

せども下半は聽道軸に對してはゞ鉛直に立てるが故に此部より三角形をなして光線(光角 Lichtkegel)を反射す

皷膜は弛張すべき彈力あるものゝあらずして殆ど延び難き膜と見なすべきあり(ヘルムホルツ)

皷膜の構造を三層に分つ一を上皮角質層となしその下に存せる結締組織を二、固有膜と名づく固有膜の纖維は外部は放線狀にて內部は輪狀ありその質硬靭にして皷膜の基礎をなす三、粘膜層は一種の脈管乳嘴を持てる粘膜にて扁平上皮を被れり

血管の主なるものは深耳動脈の枝別にして二條の靜脈を伴へりその方向は槌骨柄の後緣に添ひて臍に達し靜脈と共ゝ放線狀に分布し皷膜緣に存せる靜脈冠に流入せり

粘膜層の血管と角質層の血管とは固有層を貫ける毛細管によりて相通せり(ケッセル Kessel)、其外血管の連絡はモオスによれば皷膜輪の周緣と槌骨柄とゝ添ひてなしまたスラプチリイ弛膜を透してゝ

す、知覺神經の纖維は三叉神經の外聽道分枝より分たる

皷膜の內面には槌骨柄密着して前上緣より中央部の臍に亘れり上緣の傍にて著く隆りたる白點の外面ゝ現はるゝは槌骨短突起ありて往々この部より二三の皺襞ありて前後の皷膜緣ゝ走れり是所謂皷膜襞あり皷膜もし病的に內陷すれバ此の襞著く現るべし皷膜の內面に於て槌骨柄と皷膜襞との間の角は皷膜と並行せる膜にて掩はれたゝに下方に向ひて開ける二の囊を作れり是をトロルツの皷膜囊 Tröltsch'schen Trommelfelltaschen と名づく

外聽道及皷室の病は概ね皷膜をも併せ病ましむるものあり是その部を被へる膜の皷膜の內外層と連なれるによれり故に外聽道及間耳の病を說くにあたりて皷膜の病をも併せ說くべきを以てこゝにはたゞ皷膜に限りたる病をのみ記すべし

第一章　皷膜急性炎 Myringitis acuta.

鼓膜急性炎は多くは外聽道若くは間耳の急性炎に併發するものにて たゞこの部ゑのみ生ずるは頗稀あり原因は隙風をうけ或は冷水の耳に入る等あり

この病は俄に劇痛を以て起り緊張の感、脈搏及熱覺と烈しき耳鳴とを生ず、聽覺は少しく損せらるれど間耳急性炎に於けるが如く甚しからず通常、病は二三日にして頂點に達し後、諸症速に退きて癒も、侵さるゝは概ね一側のみ

これを檢するに鼓膜は甚しく赤色を呈せり初めは充血したる二三の血管を槌骨柄に添ひて見れども後には一様に赤腫して槌骨の周圍明あらず膜の面強く輝きて青赤色を見るに至る往々角質層の下に溢血を來し稀ゑは漿膿性の胞を生ずるおとあり、その癒るには單に充血と腫脹と去りてのちいえ或は表在の上皮剝脱して少しく分泌物を生じ折々はその中に少許の血液を交ふるか如きことありてのち癒ゆ鼓膜

ゑ孔を生ずれば鼓室も共に病にかゝるべし

◎療法◎

他の形器の急性炎を療するに同じくこれゑありても凡ての刺戟をさくべし故に耳を洗ふこと及通氣法を施すはよろしからず油劑または水劑に阿片丁幾二三滴を加へ温めて滴入するをよしとす石炭酸グリセリン(十乃至二十%)は殊に之に適せり用法は間耳急性炎の條にて云ふべしボンナフオン Bonnafont は鼓膜ゑ亂截 Skalification をおしシュワルツチェは穿孔術を施しぬ

嘗て一兵士の浴後俄に烈しき耳痛を起しゝものあり之を檢せしに豌豆大ある淡黄色の胞ありて鼓膜後部の表面より外聽道に突起せるを見き、よりてそを刺したるに漿液一滴をもらして痛は直ちに止み後二日を經て上皮の固有質より剝がれたるは再び癒着し刺したる塲所は僅ゑ鼓膜の表面に於て線狀の瘢痕をおせるのみにて癒えたり

第二章　鼓膜慢性炎 Myringitis chronica.

鼓膜の慢性炎は体質の虚弱なるものに發すること多し別に著き症狀なくたゞ耳に搔痒及緊張の感を覺え稀に痛を起すことあるのみ原因は主に異物及耵聹の鼓膜に接して存せるによる、分泌物を生ずることあり何れも甚だ惡臭あり時としては分泌物乾きて塊をなし更にその下に分泌物を生じて絶えず鼓膜を刺戟し肉芽を生せしめ治癒を妨ぐることあり聽骨はたゞ僅に損せらるゝのみ

先づ耳内を清めて檢するに鼓膜は光澤を失ひて濁り稍白色をあらはし或は上皮の所々剝がれて腫起することあり或は上皮の大部分の剝がるゝことあり時としては鼓膜の全部赤くなりて肉芽狀をなせることあり

療法

輕易の症は常に注意してその部を清潔ならしめば癒ゆべし明礬または硼酸の末を一回乃至數回用ゐるときは効を奏することあり肉芽樣に腫れたるには硝酸銀または格魯母酸を用ゐて腐蝕す、たゞし是等の藥は腫起部にのみ觸れしめて他部に炎衝を起さしめざるやう注意すべし

第三章　鼓膜溢血 Haemorrhagien in's Trommelfell.

これ鼓膜の各層間に溢血をいたすものにて稀なる症たり即ち甚しき充血を帶びたる劇しき炎衝及強き振盪の爲に生ずゥルハンチシュは通氣後に少しく溢血したるものを見きといへり溢血の量少きはたゞ點狀をなし多きは大なる斑をなす甚しきは血胞を生ずることあり鼓膜の後部に溢血を生じて甚しき耳鳴に惱めるものありしが鋭匕を

以て溢血を除きしに忽にして止みたり

溢血は自ら吸収せらるべし、トロルッは鼓膜中央部の溢血の周圍部に移動せしを經驗したり

第四章　鼓膜裂傷 Trommelfellzerreissungen.

鼓膜に裂傷を起すべき原因は次の如し

(一)外聽道に存せる空氣の俄に壓せらるゝによる即劇しき音波、爆發によりて尤稠厚なる音波の外より鼓膜を侵したるとき或は平手にて耳を打たれたる折の如く外聽道に於て空氣の稠厚にありたるときの如し

(二)多く見るは固形物によりて鼓膜の損せらるゝなり即耳を清めんとして挿入したる器により或は過て耳匙、縫針、藁の莖等にて傷くることあり

(三)鼓室の空氣の稠厚にありたるによる即噴嚏及通氣法を行ひたるときの如し

(四)頭骨の振盪及骨傷を起したるによる

裂しき音波の健康なる鼓膜にも裂傷を起さしむべきことは從前尚疑を存せしかど今はそのことの確なるを知れりハルトマンが經驗によれば嘗て砲兵の射的演習のをり監的室に於て一榴彈破裂しその傍に並びて腰かけ居たる三人の砲兵は何れも丸の方よ向へる鼓膜に裂傷を起したりと云ふ、平手にて打れて破るゝは常に左側の鼓膜なり是打つものゝ右手を用ゐるによる、往々水中に飛び入りたるとき聽道の空氣俄に壓せられて鼓膜を傷ふことあり潛水夫に於て一度これを見き、病變ある鼓膜は裂傷を起し易しポリッチェルの通氣法或はカテェテル法を行ひてすら破るゝことあり鼓膜を侵せる原働力強からざるときは只鼓膜の外皮下に溢血を起すに止まることあり裂傷は通常鼓膜の下半部に生じ一ヶ所あるおとあり或い數ヶ所あるおとあり

打擊をうけ或は高所より墜落して烈しく頭骨を震盪する時は鼓膜よ裂傷を起す或は顳顬骨の骨折に伴ふことあり而して骨折は多くは聽道後壁に於てスラプチルリイ弛膜の部より起るが故にこの膜常に破裂す

鼓膜に裂傷を起すときは耳に於て物の裂けたるが如き感あり時としては爆音を感じ稀には卒倒することあり重聽は裂傷の度と迷路の共に傷はれたるさまよりて輕重區々あり能感性耳鳴は概ね甚し頭骨に立たる整調又は通常傷はれたる方の耳に強く響くものあれども迷路の震盪を兼たるときは全く之に反す

異物は鼓膜に裂傷を起さしむると同時に聽骨及迷路壁をも傷ふことありハルトマンが經驗によれば骨て縫針にて鼓膜の後上部を傷つけたるものあり傷を受くるや否や忽ち人事不省にありて倒れ後暫くにして醒めしかど眩暈強くして起つこと能はず両三日間は烈しく嘔吐し之が爲に始めは身を起し或は立つこと叶はず癒えてのちも尚長く

多少の眩暈を殘せるを見き通常縫針にて鼓膜を破りしものはたゞ一時頭痛、耳鳴、重聽或は卒倒を起すのみあるに斯の如く重き症狀を呈したるは恐くは同時に鐙骨の位置を變じ迷路の神經器を刺戟したるが爲あるべし

鼓膜の外傷性裂傷の時を經ざるものは多くは特性を備ふその裂けたる形は通常卵圓にて若し其緣反轉すれば正圓をあすことあり、血塊の爲に閉づるは稀ありたま〳〵裂孔の相對緣ょ裂緣を見ることあり、緣は通常鋭し、尤緊要あるは鮮紅色或は暗黑色を帶びたる血を以て緣をめぐらせることあり傷を受けたる當日あらば尚其他にも血痕を認むるが故に慥に診定することを得べし

往々鼓膜の各層の相異れる大さに裂かるゝことあり即外皮層の裂かるゝおと深層よりも廣きことあり斯る折にはその現はれたる深層は周圍の鼓膜よりも白く見ゆべし出血の痕は常に外皮緣にのみあり又外皮層のみの裂けたるを經驗せしおとありき

裂孔大なるときは鼓室の内壁骨の如く黄色に見ゆるものなりワルザルヴの法を行ひてオトスコオプを用ゐれば吹音を聞くべしもし間耳炎の爲に生じたる孔ならバ水泡音を聞くべきなり

概ね數日にて諸症輕快して全く癒ゆるものなれども稀には間耳炎を續發して慢性の耳漏になることあり迷路に震盪を起せるものは豫後不良にして重聽は數日若くは數週にて多少恢復し得るも全くもとに復せず裂傷癒ゆれば其樣更に健康なる鼓膜に異らずして少しも痕跡を止めず、その癒ゆる模樣はポリッチエルの言によれば數日にして裂孔に灰白黄色の薄皮を生じ恰も鼓膜の裏面より塞ぎたるが如く見ゆと云へり

◎療法◎

裂孔の癒ゆるを促すは必要ならずこれその瘢痕なきものは自然に癒ゆべければなり瘢痕を誘發すべき總ての害物は注意して避くべし殊に感冒を懼る耳を洗ふと勿れ耳は消毒綿又は石炭酸に醸したる綿にて塞ぎ置くべし

なほさらに造りたる鼓膜の孔もまた外傷にて破れたるものと同じさまに癒ゆて未だその孔を永久に存せしむること能はず、フランクは細き金屬管を挿しポリッチエルは硬鑢鏤をさしてその目的を達せんとせしかど何れも効なかりき只そをなし得るは槌骨と共に悉く鼓膜を截り採りたるときのみ

第五章　人工鼓膜 Künstliches Trommelfell.

鼓膜の一部分傷はれたるもの或は全く破れ果てたるものはたまく人工鼓膜を用ゐてその重聽を回復し得ることあり人工鼓膜の作用はエルハルド Erhard が明めたる如く之によりて鼓膜の遺片及聽骨に壓を與へ多少音波の傳導を助くるにあり是を用ゐるは鼓膜若くは聽骨酷く潰ゆて甚しき重聽を起し且分泌物全く止みたるか或は僅に存す

るものに適せりされど斯るものにも隻耳の聽覺尋常なるときは用ゐざるを善しとす

人工鼓膜のうち千八百四十八年始めてイヽルスリィ Yearsley の用ゐたるは頗る簡便あるものあり即繃帶用の綿をまろめて小球となしグリセリン一分と水四分とを混じたるもの或は二%の石炭酸油に濕したるのちピンセットにて聽道に輸り鼓膜の遺片ある所に致すあり而してこれを耐ふれは綿球の鼓膜にあたるべき所にコロヂウムを塗りてこれに固定す千八百五十三年トンベエが人工鼓膜よつきての說世に出しより此法速に世に行はるゝを至れり氏の作りたるもの(第三十一圖)は薄き圓形の護謨片にしてその中央を銀線の柄を鉛直に附けたり

第三十一圖

人工鼓膜を用ゐるには耳翼を後外方に引きて聽道を眞直ならしめ鉛直の向きに挿入して聽道の深部に至り少しく前方によすべしそを確に入るゝにゝ病者のこれに馴るゝを肝要ありとす取り去らんとする折には同じく聽道を眞直あらしめ柄を持ちて引き出すべしイヽルスリィの綿球を除くにはピンセットを閉ぢて聽道に挿入し綿球に達したるとき開きて之を撮み出すべし

綿球は他のものよりも位置を保ち易く用法もまた簡あるが上に清潔にして刺戟少し之を用ゐるも破孔の癒ゆるを妨げず且音波を傳導することトンベエ及其他の人工鼓膜に讓らず但したま〳〵然らざることあり

人工鼓膜を用ゐれば多くは聽覺を回復すること頗る著きものあれども中には効あきおとありその著きは少しも話聲を解し得ざりし病者の之を用ゐるによりて忽ち對話をあし得るに至る、鼓膜の破れ果てたるもの及聽骨のうち僅に鐙骨のみ存したるものすら折々よき結果を見るおとあり

人工鼓膜は數日間用ゐ續けて別に障害あきことあれども多くは耳鳴、

壓感、眩暈等を起す時としては一たび止みたる分泌物の之が爲に再び生ずるが如きことあり故ゑ始めは只必要ある時にのみ數時間用ゐ漸く馴るゝに從ひて長く用ゐるやうあすべし病者によりては知覺過敏にして之に堪へ得ざるあとあり、イヽルスリィの綿球は頗る堪へ易くしてある病者は之が爲に二十九年間も甚しき重聽を復し得たりと云ふ

バルト Barth は綿帶綿を採りその一端を丸めて球とあし他端を捻りてコロジウムに浸し乾かして凡四センチメエテルばかりの柄とあしたるものを綿球に代へて用ゐたり

デルスタンシエは鑛線のさきを曲けてこゝに綿を球狀に卷き付け他部には薄く綿を纏ひて用ゐたりコセガルテン Kosegarten は往々明礬を聽道ゑ吹き入れろが結ぶ所の薄皮を人工鼓膜の料にあてきトンベエの人工鼓膜はのち種々ある形を採れり即銀柄を除きて單にゴム板を用ゐ(ヒントン Hinton)、或は之に代へて綿球(グルウベルGruber) 又は小き紙片(ブラァケ Blake) を用ゐたり斯る人工鼓膜は入るにも出すにもピンセットを用ゐ或は絲をつけ置くあとあり

ルセエは臘びきの薄絹にて義膜を造りそが中央に絲を固定したるを使用すこれを用ゐるには糸の兩端をゴム管に通じて義膜を管の一端に引つけ斯くして挿入したるのち管を去るあり義膜は其所に止まり糸は聽道にいづべし

タンゲマン Tangeman 等は人工鼓膜の用を全からしめ且破孔を閉ぢんが爲に健康ある皮を移植して良結果を得しことあり尤佳あるは卵の薄膜を植うるにあり其法は薄膜を好く破孔に適するやうに切りたるのち其鼓膜に付着すべき面に蛋白質を付け斜に口を明きたるガラス管に吸ひつけてその部に致すあり

第六章　鼓膜の緊張失常 Spannungsanomalien des Trommelfells.

これまは鼓膜の弛緩したるものと非常に緊張したるものとの二樣あり

鼓膜弛緩 Erschlaffung des Trommelfells は炎衝の後に來るものにて殊に久しき間內陷したりしものに於て甚しとすその甚しきは鼓室岬及聽骨(砧骨の長突起と鐙骨)の鼓膜面に隆起するに至る往々鼓膜の後上部に於て局所の弛緩を見ることあり

鼓膜弛緩の療法として滴藥は無効あり重復切開 multiple Incisionen 電氣燒灼法(グルウベル)によりて瘢痕を作るをよしとす

ケオンKeown は鼓膜の一部或は全部の弛緩を療する爲にコロヂウムを用ゐたりその法は通氣法を行ひたるのち耳漏斗によりてコロヂウムを注ぎ餘瀝は頭を傾け綿にて拭ひ去るありコロヂウムの膜は三四週間も保ち得べしケルレルはこの法を行ひて鼓膜の動搖及强き音によりて生ずる痛を除き得たり

鼓膜過緊 abnorme Spannung des Trommelfells は只鼓膜の皺襞にのみ起りて他は尋常なるまとあり

ポリツチエル及ルセエは斯る症の療法として皺襞を截りて治せしめたるまとあり殊に此症に伴へる能感性耳鳴はこれが爲に減じ若くば癒もべし

斯る病症ま鼓膜緊張筋の截腱術を行ふは其當を得たるものなり此術に就ては後に說くべし

重復切開を行ひ又は皺襞を截るには鼓膜刀を使用す重復切開は鼓膜臍と鼓膜外緣との間に於て行ひ兩三日を隔て四五回反復して一乃至二、五ミリメエテルの長さに截るべし隆起したる皺襞はその長軸を橫斷すべし

鼓膜の一部を電氣にて燒灼するには細き燒灼器を用ゐ深く挿入したる耳漏斗の中にて紅熾し手早く鼓膜にあつべしまの手術は燒灼器を確ま燒くべき部にいたし且鼓膜壁を傷けざるやう注意すべし

耳科新書 前編終

附錄

〔其一〕

病源候論卷六

隋大業六年(基督世紀六百十年)
太醫博士巢元方等撰

耳病諸候凡九論

(耳聾候)腎爲足少陰之經而藏精氣通於耳耳宗脈之所聚也若精調和則腎藏强盛耳聞五音若勞傷血氣兼受風邪損於腎藏而精脫精脫者則耳聾然五藏六腑十二經脈有絡於耳者其陰陽經氣有相并時并時則有藏氣逆名之爲厥厥氣相搏入耳之脈則令聾其腎病精脫耳聾者候頰顴其色黑手少陽之脈動而氣厥逆而耳聾者其候耳內煇々焞々也手太陽厥而聾者其候聾耳內氣滿

附于後

養生方導引法云坐地交叉兩脚以兩手從曲脚中入低頭叉項上治久寒不能目溫耳不聞聲

(又云)脚着項上不息十二通必愈大寒不覺暖熱久頑冷患耳聾目眩久行即成法法身五六不能變

(耳風聾候)足少陰腎之經宗脈之所聚其氣通於耳其經脈虛風邪乘之風入於耳之脈使經氣否塞不宜故爲風聾風隨氣脈行於頭腦則聾而時頭痛故謂風聾

(勞重聾候)足少陰腎之經宗脈之所聚其氣通於耳勞傷於腎宗脈虛損血氣不足故爲勞聾勞聾爲病因勞則甚有時將適得所血氣平和其聾則輕

(久聾候)足少陰腎之經宗脈之所聚其氣通於耳勞傷於腎宗脈虛損血氣不足爲風邪所乘故成耳聾勞傷甚者血虛氣極風邪停滯故爲久聾

(耳鳴候)腎氣通於耳足少陰腎之經宗脈之所聚勞動經血而血氣不足宗脈則虛風邪乘虛隨脈入耳與氣相擊故爲耳鳴診其右手脈寸口名曰氣口以前脈浮則爲陽手陽明大腸脈也沈則爲陰手大陰肺脈也陰陽共虛者此爲

血氣虛損宗脈不足病苦耳鳴嘈々眼時妄見光此是肺與大腸俱虛也左手尺中名曰神門其脈浮爲陽足大陽膀胱脈也虛者膀胱虛也腎與膀胱合病苦耳鳴忽然不聞時惡風膀胱虛則三焦實也膀胱爲津液之府若三焦實則尅消津液尅消津液故膀胱虛也耳鳴不止則變成聾

(聤耳候)耳者宗脈之所聚腎氣之所通足少陰腎之經也勞傷血氣熱乘虛而入於其經邪隨血氣至耳熱氣聚則生膿汁故謂之聤耳

(耳病痛候)凡患耳中策々痛者皆是風入於腎之經也不治流入腎則卒然脊强背直成痙也若因痛而腫生瘡瘡膿潰邪氣歇則不成痙所以然者足少陰爲腎經宗脈之所聚也其氣通於耳上焦有風邪入頭腦流至耳內與氣相擊故耳中痛耳爲腎候其氣相通腎候腰背主骨髓故邪流入腎背强背直

(耳聾候)耳聃聽者耳裏津液結聚所成人耳皆有之輕者不能爲患若加以風熱乘之則結鞕成丸核塞耳亦令耳暴聾

(耳瘡候)足少陰爲腎之經其氣通於耳其經虛風熱乘之隨脈入於耳與血氣相搏故耳生瘡

〔其二〕

外科正宗卷四

明神宗、万曆丁巳年基督世紀
千六百十七年)東海陳實功撰

耳病第八十五

耳病三焦肝風妄動而成大人由虛火實火之分小兒有胎熱胎風之別虛火者耳內蟬鳴或兼重聽出水作痒外無脹腫此屬虛火妄動之症也四物湯加牡丹皮石菖蒲及腎氣丸主之實火者耳根耳竅俱腫甚則寒熱交作疼痛無時宜柴胡清肝湯治之又有耳挺結於竅內氣脉不通疼痛不止以梔子清肝湯爲治外用黃線藥插入挺肉縫傍化盡乃愈小兒胎熱或浴洗水灌竅中亦致耳竅作痛生膿初起月間不必探藥治早項內生腫候毒盡自愈如月外不瘥以紅綿散治之則安矣

紅綿散（紅綿散、內用枯礬、麝香、胭脂、一搽將來換笑顏、小兒耳內流膿疾）

治耳內流膿腫痛既消膿尚不止方用之穆之枯礬（上白三錢）乾胭脂（二錢）麝香（一分五皿）

共研極細末磁罐收貯先用綿裹絞盡耳膿濕綿裹滾藥送入耳底自瘥

聰耳蘆薈丸（聰耳蘆薈丸、木香、芍藥、胆草、與大黃、山梔、青黛、南星等、柴、麝、青皮、共此耳）

治肝膽有火耳內蟬鳴漸至重聽不聞聲息者蘆薈大黃（蒸熟）青黛柴胡（各五錢）龍膽草當歸山梔青皮黃芩酩木香（一錢）南星（三錢）麝香（五分）

右爲末神麯ノ糊ニテ爲丸菉豆大每服二十一丸食後薑湯送下日服三次漸効

柴胡清肝湯梔子清肝湯（但見發熱、四物湯見潰瘍門、腎氣丸見腰門）

〔其三〕

醫方類聚卷七十七及七十八抄錄

明永樂年間朝鮮國輯

耳門

神巧萬全方

耳病方論

夫耳雖爲腎之候其耳聾鳴非一途也有宗脈虛聾鳴者有腎虛而聾鳴者有手少陽之脈逆而聾鳴者有手太陽厥而聾鳴者有風聾者有勞聾者有上焦熱而聾者夫血氣虛損宗脈不足爲風邪所乘邪入於耳與眞氣相搏則耳鳴嘈嘈然者宗脈病也足少陰腎之經虛損而精脫其候顴顴黑而耳聾者腎自病也手少陽之脈動而氣逆耳內煇煇焞々然者三焦病也三焦屬手少陽也手太陽厥而耳內氣滿者少腸病也少腸屬手太陽也風入於耳脈使經氣否塞不得宣通聾而時頭痛者風聾也將得所血氣平和其聾則輕或房室不節其聾則甚此勞聾也腎實生熱上膲氣壅邪熱入耳耳因而聾此爲熱聾治法各隨其證而治之

斷病提綱

耳證論

耳爲聽會腎之官五臟關通理可詳內運唏噓呵欠哂外司角徵羽宮商卒然內塞不聞聲勞佚憂思過度生聾聵耳鳴膿血出風寒暑濕搏於經聹耳底耳證多端用意消詳不壹般或實或虛隨證療百虫入耳別爲看

直指方

耳論

耳屬足少陰之經腎家之竅竅於耳也腎通乎耳所主者精精氣調和腎氣充足則耳聞而聰若勞傷氣血風邪襲虛使精脫腎憊則耳轉而聾又有氣厥而聾者有挾風而聾者有勞損而聾者蓋十二經脈上絡於耳其陰陽諸經適有交并則臟氣逆而爲厥氣搏入於耳是爲厥聾必有時乎眩暈之證耳者宗脈之所附虛而風邪乘之風入於耳之脈使經氣痞而不宣是爲風聾必有時乎頭痛之證勞役傷於血氣淫慾耗其精元疲悴力疲昏昏聵聵是爲勞聾有能將適得所血氣和平則其聾暫輕其或日就勞傷風邪停滯則爲久聾之證矣外此又有耳觸風邪與氣相搏其聲嘈嘈眼或見光謂之虛鳴熱氣乘虛隨脈入耳聚熱不散膿汁出焉謂之膿耳人耳間有津液輕則不能爲害若風熱搏之津液結聊成核塞耳亦令暴聾謂之耵耳前是數者腎脈可推風則浮而盛熱則洪而實虛則濇而濡風爲之疎散熱爲之清利虛爲之調養邪氣屏退然後以通耳調氣安腎之劑主之於此得耳中三昧

嚴氏濟生方

耳論治

夫耳者腎之所候腎者精之所藏腎氣實則精氣上通聞五音而聰矣若疲勞過度精氣先虛於是乎風寒暑濕得以外入喜怒憂思得以內傷遂致聾聵耳鳴熱壅加之出血膿則成聤耳底耳之患候其顏頰色黑者知其耳聾也亦有手少陽之脈動厥而聾者耳內煇煇聤聤也手太陽脈動厥而聾者耳內氣滿也大抵氣厥耳聾尚易治精脫耳聾不易藥愈諸證既殊治各有法

嚴氏濟生續方

耳評治

夫耳者腎之候腎乃宗脈之所聚其氣通於耳腎氣和平則聞五音而聰矣腎氣不平則耳爲之受病也前方論治載之備矣醫經云腎氣通於耳心寄竅於風寒暑濕燥熱得之於外應乎腎憂愁思慮得之於內係乎心心氣不平上逆於耳亦致聾聵耳鳴痛耳痒耳內生瘡或爲聤耳或爲掀脣六淫傷之調乎腎七情所感治乎心醫療之法寧心順氣欲其氣順心寧則耳爲之聰矣宜用局

方妙香散以石菖蒲煎湯調服以順心氣參丹蜜砂以寧心君調腎之藥前方所載薤蓉圓是也續有二方爲之佐使參而用之可也

三因方

耳病證治

腎雖寄竅於耳當知耳爲聽曾主納五音外則宮商角徵羽內則唏噓呵吹哂內關五臟外合六淫故風寒暑濕使人聾聵耳鳴憂思喜怒多生內塞其如勞逸不言而喻復有出血生膿聤耳底耳或耵聹不出飛走投入諸證既殊治各有法

聖濟總錄

耳統論

腎氣通於耳心寄竅於耳氣竅相通若窓牖然音聲之來雖遠必聞若心腎氣虛精神失守氣不宣通內外窒塞斯有聾聵之疾經所謂五藏不和則九竅不通是也

千金方

治腎熱背急攣痛耳膿血出或生肉塞之不聞人聲方

磁石　白朮　牡蠣各五兩　甘草一兩　葱白　生地黃各一升　芍藥四兩　大棗十五枚　生麥門冬六兩

右九味㕮咀以水九升煮取三升分三服

治耳聾乾耵聹不可出方

擣自死白項蚯蚓安葱葉中用麵封頭蒸令熟並化爲水以汁滴入耳中滿即止不過數度即挑易出瘥後髮裹鹽塞之肘後以療蚰蝨入耳立効○聖惠方地竜五七條温者右擣取汁數滴灌之即輕挑自出

又方取酢三年者灌之暴良次用緜塞半日許必有物出

治耳鳴如流水聲不治久成聾者

掘生烏頭乘濕削如棗核大內耳中日壹易不過三日愈亦療瘖及卒風聾病

治聹耳出濃汁方

礬石　黃連　烏賊骨　赤石脂

右四味各等分爲末以綿裹如棗核大內耳中日三小品不用赤石脂姚氏加龍骨一兩

治聹耳膿水不絕宜用此方

白礬半兩燒灰　麻勃一分　木香一分　松脂一分　花烟脂一分

右件藥擣羅爲末每用時先以綿子淨拭膿後滿耳塡藥効

治百蟲入耳方未蜀椒一撮以酢半升調灌耳中行二十步即出

治耳疼痛諸方

夫患耳中策策痛者皆是風入於腎之經也不治流入腎則卒然變脊强背直瘂也若因痛而腫即生瘂也癰節膿潰邪氣歇則不成瘂也所以然者足少陰爲腎之經宗脈之所聚其氣通於耳上膲有風邪入於頭腦流至耳內與氣相擊故耳中痛耳爲腎候其氣相通腎候腰脊主骨髓故邪流入腎經則脊强背直也治耳疼痛揷耳扳風毒附子丸方

附子壹枚去皮臍生用 菖蒲壹分 麝香壹錢 杏人壹分湯浸去皮尖 白礬壹分燒灰 蓖麻子叁十粒去皮

右件藥先擣附子菖蒲白礬爲末次擣杏人蓖麻爲膏研入麝香相和丸如棗核大以蠟裹大針穿透插於耳中日壹換之

治耳疼痛宜此方

附子壹枚

右以醋微火煎令軟削可耳蹂裹塞之

治耳腫諸方

夫耳腫者由腎氣虛風熱乘之隨脈入於耳與氣血相搏稽留不散故令耳腫也

治耳腫木香散方

木香壹兩 漢防巳壹兩 赤芍藥壹兩 玄參壹兩 白斂壹兩 川大黃壹兩 川芒硝壹兩 黃芩壹兩 紫葛壹兩 赤小豆叁分

右件藥擣細羅爲散以榆白皮擣取硝和少許塗之更用帛子塗藥貼腫處取汁爲度

治耳卒腫宜用此方

瓠瓢根生者洗令淨

右以刀削壹頭令尖可入耳中以臘月猪脂煎三五沸冷即塞於耳中

聖惠方

治耳聾方

夫腎爲足少陰之經而藏精而氣通於耳耳宗脈之所聚也若精氣調和則腎藏强盛耳間五音若勞傷血氣兼受風邪損於腎藏而精脫精脫者則耳聾然五藏六腑十二經脈有終於耳者其陰陽經氣有相并則有藏氣逆名之爲嚖氣搏入於耳之脈則令聾其腎病精脫耳聾者其候頰顏色黑手少陽之脈動而氣嚖逆而耳聾者其候耳內煇煇焞焞手太陽嚖而聾者其候聾而耳內氣滿也

治耳聾方

松脂叁分 巴豆壹分去心皮 大麻子人叁分 蕭陸香叁分 食鹽叁分

右件藥和擣如膏丸如棗核大內於耳中日壹度換之

又法　杏人壹分湯浸去皮尖雙人炒熟　甜葶藶壹分隔紙炒令紫色　鹽末壹分　右件藥擣研令細以少許猪脂合煎丸棗核大以絲裹塞耳中

治勞聾諸方

夫勞聾是腎氣虛乏故也足少陰腎之經宗脈之所聚其氣通於耳勞傷於腎則宗脈虛損氣血不足故名勞聾爲其病因勞則甚若有時將息得所氣血和平其聾則輕或房室不節其聲則甚也

治勞聾腎氣不足耳無所聞宜服熟乾地黃散方

熟乾地黃壹兩　磁石壹兩擣碎水淘去赤汁　桂心壹兩　附子半兩炮裂去皮臍　人參壹兩去蘆頭　牡荆子壹兩　當歸壹兩剉微炒　牡丹皮半兩　白茯苓壹兩　芎藭半兩

右件藥擣篩爲散每服先以水一大盞半入羊腎壹對去脂膜切煎至壹盞去腎入藥五錢棗三枚生薑半分同煎至五分去滓每於食前溫服

治勞聾塞耳菖蒲散方

菖蒲半兩　山茱萸半兩　土瓜根半兩　牡丹皮半兩　牛膝半兩去苗　附子半兩炮裂去皮臍　蓖麻子半兩炒　磁石壹兩燒令赤醋淬七編擣碎細研

右件藥擣細羅爲散每用半錢用絲裹塞耳中壹日壹易之

治耳久聾諸方

夫足少陰腎之經宗脈之所聚其氣通於耳勞傷於腎宗脈虛損血氣不足爲風邪所乘故成耳聾勞傷甚者血虛氣極風邪停滯故爲久聾也

治耳聾久不差方

鍊了松脂壹兩　食鹽半兩　巴豆半兩去皮心　蓖麻子半兩去皮　薰陸香半兩　杏仁半兩湯浸去皮尖　石膏分細研

右件藥擣細羅爲末以猪脂壹兩黃蠟壹兩先於銚子中銷令鎔然下諸藥末攪令勻捻如棗核大中心通孔如米粒許以薄絲裹耳內中三日壹易

治耳聾二十年不差塞耳楓香丸方

楓香壹兩　巴豆七枚去皮心微炒　松脂參兩半　黃蠟半兩　波律膏半兩　胡桃人半兩

右件藥先擣楓香巴豆然下松脂又擣次銷蠟下之擣令相和後下婆律膏胡桃人熟擣如泥膏成丸如棗核大以絲裹日參兩度內耳中有汁出盡即愈

治耳虛鳴諸方

夫腎氣通於耳足少陰耳之經宗脈之所聚勞働經血而血氣不足宗脈則虛風邪乘虛隨脈入耳與氣相搏故爲耳鳴診其各手脈寸口名氣口以前脈浮前爲陽手陽明太陽脈也沉則爲陰手太陰肺脈也陰陽俱虛者此爲血氣虛損宗脈不足病苦耳鳴嘈嘈是也眼時忘見光此是肺與太陽俱虛也左手尺中名曰神門其脈浮爲陽足太陽膀胱脈也虛也膀胱虛也腎與膀胱合爲病苦耳鳴忽然不聞時時惡風膀胱虛則三焦實實則剋消津液故膀胱虛也耳鳴不止則變成聾也

治耳中蟬鳴乾地黃散方

熟乾地黃壹兩去蘆頭　防風壹兩去蘆頭　桑耳叁分微炙　枳殼叁分麩炒去瓤　杏人叁分湯浸去皮尖雙人麩炒微黃　黃連壹分去鬚　木通叁分剉　黃耆叁分剉　槐鄰叁分　茯神叁分　甘草叁分炙微赤剉

右件藥擣羅爲散每服叁錢以水壹中盞入生姜半分煎至五分去滓合煎溫服

治耳中常有聲哄哄者塞耳葶藶丸方

甜葶藶壹兩流水洗淨微火熬搗爲末　山杏人半兩湯浸去皮尖雙人　鹽花叁錢

右件藥同研了更入臘月猪脂壹錢和研如泥硬軟得所丸如棗核大絲裹壹丸內耳中兩日壹換初安藥三兩日耳痛出惡膿水四體不安勿懼之壹百日內愼壹切毒魚肉生冷滑膩等

聖濟總錄

治勞聾經久塞耳硫黃散方

石硫黃　雌黃各壹分

右武味研爲細末每以壹錢匕絲裹塞耳中數日則聞人語聲

治勞聾滴耳方

童子小便

右壹味以少許灌入耳

治耳聾出膿疼痛附子丸方

附子地裂去皮臍　菖蒲米泔壹宿剉燒　礬石熬令汁枯　蓖麻子人研　松脂研各一兩　杏人去皮雙人炒二兩　染烟脂半兩

右七味擣研爲末鎔黃蠟揉和如棗核大針穿壹孔子令透塞耳中日一換之

治耳聾久不差方

礬石（燒令汁枯一兩）鉛丹（炒一錢）

右二味同研勻細每用半字摻入耳中

治耳內膿水疼痛不止礬黃散方

礬石（晉州者燒令汁枯半兩）雄黃（好者一分）

右二味同研極細每用手指甲挑半字先以緜杖子拭耳內令乾却滴生麻油一二點入耳內仍以緜杖子惹藥末在耳中不拘久近只一二度差

耳門食治

聖惠方

食治耳鳴耳聾諸方

夫耳鳴耳聾者腎爲足少陰之經而藏精其氣通於耳耳宗脈之所聚若精氣調和則腎氣盛五音分曉若勞傷血氣兼受風邪損於腎藏而精氣脫則耳聾

也血氣不足宗脈即虛風邪乘虛隨入耳中與氣相擊則爲耳聾也

治五藏氣壅耳聾白鵝膏粥方

白鵝脂二兩　粳米叁合

右件和煮調和以五味葱豉空腹食之

治必用全書心用之書親養老書治老人耳聾不差鯉魚腦髓粥方

鯉魚腦髓二兩　粳米叁合

右煮粥以五味調和空腹食之

治耳聾及鼻不聞香臭乾柿粥方

乾柿三枚細切　粳米三合

右於鼓汁中煮粥空腹食之衛生易簡方

耳門禁忌

巢氏病源

耳聾候

養生方云勿塞故井及水瀆令人耳聾目盲

也血氣不足宗脈即虛風邪乘虛隨入耳中與氣相擊則爲耳聾也

治五藏氣壅耳聾白鵝膏粥方

白鵝脂二兩 粳米參合

右件和煮調和以五味葱豉空腹食之

治必聾耳聾不差鯉魚腦髓粥方

鯉魚腦髓二兩 粳米參合

右煮粥以五味調和空腹食之

治耳聾及鼻不聞香臭乾柿粥方

乾柿三枚細切 粳米三合

右於豉汁中煮粥空腹食之衛生易簡方

耳門禁忌

巢氏病源

耳聾候

養生方云勿塞故井及水濵令人耳聾目盲

耳鍼灸

千金月令

主耳卒疼痛方灸手腕中對虎口處隨病左右三五壯

神巧萬全方

耳病

治耳鳴聾方

客主人耳聾壯如蟬聲

凡耳中風聲鳴刺商陽入一分留壹呼灸三壯左取右右取左如食頃

耳門導引法

巢氏病源

耳聾候

養生方導引法云坐地交叉兩脚以兩手從曲脚中入

低頭 叉項上治久塞不能自温耳不聞聲

又曰脚著項上不息十二通必愈大塞不覺暖熱久頑冷患耳聾目眩久行即

成法

醫方類聚卷二百四十二抄錄

小兒門

巢氏病源

耳鳴候

手太陽之經脈入於耳內小兒頭腦有風者風入乘其脈與氣相擊故令耳鳴則邪氣與正氣相擊久即邪氣停滯皆成

中風掣痛候

小兒耳鳴及風掣痛其風染而皆起於頭腦有風其風入經脈與氣相動而作故令掣痛其風染而漸至與正氣相擊輕者動作幾微故但鳴也其風暴至正氣又盛相擊則其動作疾急故掣痛也若不止則風不散津液壅聚熱氣加之則生黃汁甚者亦有膿也

千金方

治小兒聤耳方末石硫黃以粉耳中日一夜壹

聖惠方

治小兒耳聾不差方

芦麻子十枚去皮棗肉七枚

右件藥同擣如膏每取雞核大絲裹內於耳中日一易之

治小兒聤耳出不止白礬散方

白礬灰半兩 龍骨末半兩 黃丹半兩微炒 麝香壹分

右件藥同研令細先以絲杖子展却耳中膿水用散半字分爲兩處摻在耳內日三用之勿令風入

治小兒聤耳汁出汁治外邊生惡瘡瘍肉宜用雄黃

散方

雄黃半兩細研 黃芩末一分 會青一分研細

右件藥都細研令勻以絲裹豆大塞耳中日再換之

直指小兒方

耳者腎之候小兒腎經氣實其熱上衝於耳遂使津液壅滯爲稠膿爲清汁者此也亦有沐浴水入耳中水濕停留傳於血氣醞釀成熱亦令耳膿久不瘥變成聾耳

龍骨散○得効方明礬散治腎經有熱上衝於耳遂使津液壅滯爲稠膿爲清汁耳內痛亦有沐浴水入耳中濕氣停滯爲膿但不疼二證久不瘥變成聾耳

明礬煅 龍骨研各三錢 黃丹煅二錢 胭脂一錢 麝小許

右細末先以絲杖撚去水次以鵝毛管吹藥入耳

保童秘要

亭耳汁不止方

白礬壹分 龍腦少許

右並細研以生麻油調每日三度點之每度點壹小豆許

明治二十六年二月二十四日印刷
同　年二月二十七日出版

正價金八拾五錢

編者兼發行者　千葉縣士族　賀古鶴所　東京市神田區表猿樂町三番地
印刷者　木元由太郎　東京市日本橋區藥研堀町三十三番地
圖畫彫刻者　蒼虹堂　松崎留吉　東京市淺草區北清島町七十九番地

版權所有

發兌書林

日本橋區馬喰町二丁目　島村利助
本郷區春木町三丁目　同支店
日本橋區通三丁目　丸善書店
本郷區湯嶋切通坂町　南江堂
大坂心齋橋通一丁目　松村九兵衛
熊本新町二丁目　長崎次郎

（東京　藥研堀活版所印行）

醫學士保利眞直纂著

眼科學　卷之一　正價金七拾錢
卷之二　正價金壹圓廿五錢
卷之三　正價金壹圓拾錢

醫學士甲野業
醫學士保利眞直
醫學士井上通泰　編纂

眼科學講本　全三冊　正價金三圓六拾錢

陸軍軍醫學校教官
陸軍一等軍醫ドクトル中島一可譯

解剖學講本　全三冊　着色圖入　正價金三圓六拾錢

醫學士賀古鶴所先生撰定

新式耳科。喉頭科。鼻科診斷器械　壹具二拾品　金十七圓

新式耳科。喉頭科。鼻科手術器械　壹具三拾一品　金三十五圓

新式喉頭手術器械　壹具拾一品　金九圓五十錢

東京市本郷區春木町二丁目二十二番地
製作、販賣人　鈴木淺之助

58
3

58
3

060143-001-0

58-3

耳科新書

賀古鶴所／編

前

M26,27

CBK-0021